

行政の計画づくりや参加・協働の方法として、ワークショップが行われる。地域の計画づくりを支援していた頃の経験で2000年代初頭のワークショップでは、「参加の爆発」がよくみられた。不満を持つ市民がワークショップの場で強い行政批判を繰り返して、市民同士の話し合いどころではなかった。また、市民活動団体も考え方が同じでなく、法人格をもったNPOを任意団体が批判する場面もまま見られた。知り合いのコンサルタントは、その不毛さを憂い、転職をしたほどだった。それに比べ、今日のワークショップは楽しい。手慣れたファシリテーターが円滑に進行し、参加者の笑顔が多く、満足度も高い。学校教育において、協

対話のすすめ

調性を重視したグループ学習が定着してきていることも一助であろう。

しかし、楽しいだけでいいのだろうか。市民から意見聴取、アイデア出し等を目的としていても、（市民の意見を聞いたという）アリバイ工作にとどまり、出された意見が大事に扱われ

一日一題

ていないように見える。このため、参加者の偏り、思い込みや事実誤認を是正し、市民意見を反映する仕組みをつくる等の改良が必要である。

そのうち、筆者は「対話」という手法に注目している。対話とは「他者との話し合いと分かり合いを通じて、他

山陽学園大 地域マネジメント学部教授 白井 信雄



◇筆者紹介（しらい・のぶお）浜松市出身。大阪大大学院前期課程環境工学専攻修了。博士（工学）。民間シンクタンク勤務、法政大教授などを経て2018年に岡山市に移住し現職。専門は環境政策、持続可能な地域づくりの実践論。近著に「持続可能な社会のための環境論・環境政策論」。59歳。

者、自分、関係、社会を変えていく」ことだ。従来の参加手法との違いは、異なる考えを理解し合うための傾聴を重視し、相互理解を踏まえて、自分の考えを見直し、深めていくことにある。これから毎週木曜日、「対話」という視点を持ちつつ、SDGs（持続可能な開発目標）や環境に関する筆者の活動や研究を紹介していく。

2021・4・1